

アマデウス通信

(制作・著作) 日本モーツァルト愛好会

〒152-0022 東京都目黒区柿の木坂2-22-23

朝吹 英和 方

2018. 08. 25 No. 50

TEL&FAX 03-3725-7179

「アマデウス通信」創刊50号記念

私の好きなモーツァルト・ベスト10



アンケート結果

日本モーツァルト愛好会の機関紙「アマデウス通信」が、創刊50号を迎えるのを記念して「私の好きなモーツァルト・ベスト10」のアンケート調査を実施したが、その結果がまとまった。

110人の会員（法人会員を除く）のうち82人から回答をいただき、回答率は74・5％と関心の高さをうかがわせた。10曲リストアップするのも、それに順位をつけるのもやっかいな作業だったと思われるが、多くの方にご理解、ご協力いただき、プロジェクトチーム一同、深く感謝している。ありがとうございました。

栄えある第1位は、オペラ「フィガロの結婚」。273点を獲得し、他を寄せ付けない圧倒的な強さだった。第2位のピアノ

協奏曲第20番、第3位のクラリネット協奏曲、第4位のオペラ「魔笛」、第5位の交響曲40番は僅差で、ほとんどダング状態。過去の調査と比べてみてもベスト10の常連という感じだった。モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」が堂々とランクインしているのは、愛好会らしさといえるだろう。

愛好会の重鎮ともいえる5人の方に集まっていたいただき、このベスト10をどのように見るかについて、率直に語り合っていた。含蓄のあるご意見が多く、非常に参考になると思う。

なお、このプロジェクトは、アマデウス通信編集長の泉茂行を中心に左近允輝一、桐生雅明、神谷昌孝、井戸新子の5人でチームを作り、アンケートの実施、結果の集計、パソコン分析、座談会などを行ってまとめた。

調査方法と結果について

「私の好きなモーツァルト・ベスト10」のアンケート用紙を会員に配布し、10曲をリストアップのうえで、この10曲に順番をつけていただいた。

各人のベスト10に1位から順に10点、9点、8点・・・1点と点数をつけ、この点数の合計で総合ランキングを決めた。

上位の曲は、1位や2位に挙げた人が多くて、高い点数を獲得している。

例えば、フィガロの結婚は、1位に挙げた人が9人いて、これだけで90点。クラリネット協奏曲は8人、ドン・ジョヴァンニ、交響曲40番が5人、ピアノソナタ11番、交響41番、クラリネット五重奏曲が4人。総合順位が高い曲は、1位に挙げた人が多い曲ともいえる。

1位10点・・・10位1点のような差別化をせず、リストアップされた曲は全

部1点という単純集計もやってみたが、その順位は、差別化集計とほとんど変わらなかった。

「10曲なんて書けない」と随分言われたが、10曲書かなかった人はほとんどいなかった。素人、初心者と謙遜しながら結構「通」の人が多く、ベスト30の調査でも可能だろうというのが集計した印象だ。

なお、回答者82人、回答率74・5%だが、締め切りを過ぎてからの回答が2件あった。全体の集計が壊れるので、加えなかったが、実際は回答者84人、回答率76・4%である。

私の好きなモーツァルト・ベスト10 （集計結果）

順位	K 番号	得点	曲 名
1	492	273	オペラ 《フィガロの結婚》
2	466	214	ピアノ協奏曲第20番 ニ短調
3	622	207	クラリネット協奏曲 イ長調
4	620	201	オペラ 《魔笛》
5	550	189	交響曲第40番 ト短調
6	618	155	モテット《アヴェ・ヴェルム・コルプス》 ニ長調
7	551	146	交響曲第41番ハ長調 《ジュピター》
8	581	141	クラリネット五重奏曲 イ長調
9	527	139	オペラ 《ドン・ジョヴァンニ》
10	331	124	ピアノ・ソナタ第11番 イ長調 《トルコ行進曲付》

過去のアンケート結果との比較

2018年(会報 50 号)		2006年(生誕 250 年)		1994年(会創立 15 年)	
1 位	フィガロの結婚	1 位	クラリネット協奏曲	1 位	クラリネット協奏曲
2 位	ピアノ協奏曲 20 番	2 位	クラリネット五重奏曲	2 位	ピアノ協奏曲 23 番
3 位	クラリネット協奏曲	3 位	フィガロの結婚	3 位	魔笛
4 位	魔笛	3 位	魔笛	3 位	クラリネット五重奏曲
5 位	交響曲 40 番	5 位	アヴェ・ヴェ・ヘルム・コルプス	5 位	ピアノ協奏曲 20 番
6 位	アヴェ・ヴェ・ヘルム・コルプス	5 位	レクイエム	5 位	ピアノ協奏曲 27 番
7 位	交響曲 41 番	7 位	交響曲 40 番	7 位	ドン・ジョヴァンニ
8 位	クラリネット五重奏曲	7 位	フルトとハープのための協奏曲	7 位	レクイエム
9 位	ドン・ジョヴァンニ	7 位	アイネ・クライネ・ナハトムジーク	9 位	フィガロの結婚
10 位	ピアノソナタ 11 番	10 位	ピアノ協奏曲 27 番	10 位	アヴェ・ヴェ・ヘルム・コルプス
				10 位	交響曲 41 番



私の好きなモーツァルト・ベスト10 特別座談会

座談会出席のみな

さん

- ・紺野 信寿 1988年入会
- ・宮田 宗雄 元代表 1991年入会
- ・吉田 智子 副代表 1992年入会
- ・高橋 勇 前代表 1996年入会
- ・朝吹 英和 代表 2013年入会
- ・左近允輝一 (司会)

◆管弦楽曲とソナタが苦戦

——ベスト10の結果をご覧になって、総体的にはどのような印象を持たれましたか？

吉田 ベスト10を見ると、モーツァルトの若いころの曲ではなくて、全部ウィーンに来てからの曲ですね。皆さん、熟成したモーツァルトの曲を選んでいらっしゃるなという感じがしました。

高橋 クラシック音楽にはジャンルがありますね。「レコード芸術」などによると、「交響曲」「管弦楽曲」「協奏曲」「室内楽曲」「ソロ曲」「オペラ」「声楽曲」の7つに分けられています。モーツァルトは、7分野をすべて網羅している数少ない作曲家ですが、ベスト10を見ると、「管弦楽曲」という大きなジャンルが入っていません。これは、おもしろい。管弦楽曲の中には名曲もたくさんありますし、好きな人も多いと思うのです。演奏もされています。それなのに入っていない。ちょっと意外でした。

また、ソロ曲も、ベスト10では、ピアノソナタ11番の1曲だけ。ベスト30まで下げてみても、この1曲しかないのです。不思議な話です。これはモーツァルトに対して、ちょっと失礼な話ではないか。あれだけピアノソナタやバイオリンソナタの名曲があるのにベスト30で1曲とは。

好みの傾向が何か流れの中で作用されていて、本当にいい曲がテーブルの上に上がってきていないのではないかという感じもありました。

宮田 全体的に見ますと、妥当な線が来たなという感じです。このベスト10という試みは、過去にもやっています。愛好会創立15年（1994年）のときと、モーツァルト生誕250年（2006年）の時です。調査方法が違うので、単純には比較できないのですが、やはりソナタは入っていない。ソナタは、全部ひっくるめて順位

を決めるというやり方をすると、弱いところがありますね。

紺野 私の好きなモーツァルトの曲を選ぶということですから、ジャンルとか、曲の長短とかそういうことではなく、みなさん好きなものを出してきたのだらうと思います。

やはり、一番人気があるのはオペラですね。フィガロの断トツをはじめ、ベスト10に3曲入っている。それから、交響曲も根強い人気がありますね。ベスト10で2曲、ベスト30だと5曲もある。ピアノ協奏曲も根強い人気がある。ベスト20に4曲。

意に反して少なかったのが宗教曲。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」が入っていますが、これは、毎年みんなで歌っているから。私は「レクイエム」が入ってくると思っていました、12位でした。

朝吹 モーツァルトほど、多彩なジャンルの作品を幅広く、奥深く書いた作家はいません。ベートーヴェンですらオペラは1曲だけ、それも名曲とは言えないのです。

どのジャンルが皆さんお好きかで、結果は別れるわけですが、オペラとか協奏曲を含めた管弦楽が上位に来るのは、モーツァルトの音楽が持っている多様性、色彩感覚、変化、そういったものを一番あらわすのがオペラでありコンチェルトを含めた管弦楽なのということなのでしょう。

ですから、室内楽とか、ピアノソナタといったソロ曲は、ガチンコ勝負をすると厳しいのです。

◆オペラ大健闘

——「フィガロの結婚」、「魔笛」、「ドン・ジョバンニ」と、3大オペラがベスト10入りし、「コシ・ファン・トッテ」も18位とオペラが健闘しました。

高橋 オペラは、モーツァルト自身ももっとも力を入れたジャンルです。その成果を250年後のわれわれが評価しているということは、本当に素晴らしいことです。古くても新しい、決して古くはならないということだと思います。

朝吹 オペラの上演がグーっと増えてきていますね。オペラというジャンルは、生で接しないとその良さがわからないので、この上演機会増加も大きな要素としてあると思います。

逆に言うと、「ツァイーデ（後宮）」が1点だった。上演がほとんどありませんし、新国立でもやりません。

吉田 「フィガロの結婚」がトップに来るとは、意外でした。しかし、モーツァルトが心血を注いだ3大オペラがベスト10に入り、ベスト20だと4曲入っているということは、素晴らしいと思います。

——「トルコ行進曲」や「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」といった超有名な曲は、選ばれないのではないかという下馬評もあったのですが、トルコが10位、アイネ・クライネが14位と上位に入ってきました。

吉田 定番中の定番なので、私は入ってこないのではないかと考えていました。ピアノを少しでもやったことがある人は、11番のソナタを入れたのでしょうか。また、この11番は例会でも何度もやっていて、みなさんおなじみの曲です。

「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」は、第1楽章は元気な曲ですが、第2楽章は涼しげで、夏に聞くのにピッタリ。季節的なこともあって、入ってきたような気がします。

超有名曲が入っているということは、みなさん斜に構えて通ぶらず、素直に選んでいるという感じですね。モーツァルト愛好会は素直の人が多いことの表れでは？

高橋 季節の話をしますとね、私は「レクイエム」がベスト10から落ちたのは、アンケート調査をしたのが夏だからだと思っています。夏じゃなくて、冬にアンケートをやったら、「レクイエム」はもっと上に行っただと思いますよ。そんな感じがする曲です。

◆アヴェ・ヴェルム・コルプスの魅力

——何がトップになるのだろうかという話が事前に随分あり、「レクイエム」ではないかという人もいたのですけど。

朝吹 「レクイエム」は未完成の曲ですよ。その点で、「レクイエム」が上位に行くのは納得できません。魅力的な曲ではあるけれど、聞いていて物足りなさを感じるのですね。まあ、私の個人的な印象ですけど。

宮田 「レクイエム」が伸びなかったのは、バランス感覚もあるのではないですか。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」を入れたので、宗教曲は1曲でいいという感じ。私も、実はバランスを考えてしまって、宗教曲となると「アヴェ・ヴェルム・コルプス」を外せなかった。

——「アヴェ・ヴェルム・コルプス」が堂々の6位というのは愛好会的ですね。過去の調査でもベスト10に入っています。

吉田 みなさん、毎年歌っていて、思入れが強いのでしょうか。この曲は、歌ってみると静謐なんですけど、高ぶりを感じる曲なのですね。モーツァルトのミステリアスさを感じさせる曲でもあります。

◆映画の影響が反映

——クラリネットが毎回強いわけですけど、今回も3位に「クラリネット協奏曲」、8位に「クラリネット五重奏曲」が入りました。

紺野 「クラリネット協奏曲」は人気があるのですね。

宮田 1994年と2006年で1位、今回3位ですから、大変なものです。かつて、このケッヘル番号でないと入会しないといっていた人がいたぐらいなのです。

紺野 「クラリネット協奏曲」がいいというのだったら、「ホルン協奏曲」もいいと思うのですけどね。

高橋 「クラリネット協奏曲」は、第2楽章がいいのではありませんか。あのメロディーに泣けるという人が相当いると思います。

朝吹 第2楽章といえば、「ピアノ協奏曲21番」が10位と2点差の11位ですが、こんなに上位にいるのは、第2楽章が関係していると思います（第2楽章はスウェーデン映画「みじかくも美しく燃え」で使われ、有名になった）。23番や27番をしのいで上位にいるのは、それしか考えられません。演奏会でも21番はそんなにやる曲ではありません。

吉田 「ピアノ協奏曲20番」が2位にいるのも、第2楽章が関係していると思いますね。映画「アマデウス」のエンディングで使われ、人気が出たのです。

高橋 トルコ行進曲が好きだから「ピアノソナタ11番」を選んだ人もいるだろうし、2楽章がきれいだから「ピアノ協奏曲21番」を入れた人もいるだろうし、それはそれでいいんじゃないかと思いますよ。

——交響曲の話をしたいのですが、ベスト10に2曲、ベスト20に3曲、ベスト30に5曲でした。

朝吹 25番が21位に入ってきたのは意外でした。映画「アマデウス」の冒頭の部分で使われた影響なのでしょう。25番がプラハ、ハフナー、リンツをしのぐとは思えません。

高橋 第1楽章の出だしの訴える感じが強い印象を与えているのでしょうか。

——25番は私のケッヘル番号ですが、評論家の中には、全交響曲の中で25番が一番いいという人もいます。

朝吹 人それぞれですから、そういう意見もあるでしょう。

高橋 交響曲は、モーツァルトにとって、もしかしたら一番素晴らしい形式で書かれたはずなのですが、堅苦しいせいなのか、全体的には伸びませんでしたね。

さっき、バランス感覚の話が出ましたが、私は、自分が好きな曲というよりは、モーツァルトの各ジャンルから一つずつという選び方をしてしまった。このバランスというのは、いつも聞いているとか、一番好きだということと、ちょっと違うのですね。それで、交響曲は39番しかあげなかったのですが、41番はもっと好きかもわからないし、40番だって好きだし。ですから、モーツァルトに対して失礼なことをしてしまったという罪悪感のようなものがあるの

です。ジュピターを入れずに申し訳なかったという感じ。

◆次はモーツァルト推薦盤アンケート？

——今回は、10曲を選んでいただき、それに順位をつけ、点数をつけ集計したわけですが、この調査方法はいかがでしたか。「順位など付けられない」「ナンセンスだ」と随分お叱りも受けました。

宮田 このアンケートのやり方には、いろいろな意見がありましたが、私はお遊びでいいと考えます。こういう遊びを、モーツァルトは喜んでくれるのではないのでしょうか。

朝吹 「難しい」とか「ナンセンス」という声は確かにありました。しかし、逆説的に言うと、「難しい」は、モーツァルトの音楽の幅広さ、奥深さと関係しています。作品の優劣の価値判断ではなく、自分が好きかどうかということですから書けないはずはないのですが、どうしても価値判断が入ってくる。

ただ、私は、宮田さんのおっしゃる通り、ゲーム感覚、お遊びでいいと思っています。

高橋 私は好きな曲に順位をつけるのが一番不本意でした。モーツァルトに申し訳ないという気持ちです。差別化せず、ただ好きな曲を選ぶだけの単純な集計のほうがよかったのではないかと思います。

紺野 私は、今回の調査を通じて感じたことがあるのですが、それは声楽曲が少な

いということです。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」が6位に入っていますが、リートとかコンサートアリアが出てこない。これは、啓蒙のやり方と関係しているのではないか。歌というとオペラになってしましますが、もっと例会でも取り上げてほしいと思います。

それと、今回の調査はこれでいいと思いますが、次は、この曲はだれの演奏がいいかという人気投票というか、アンケート調査というか、そんなものを作ってほしい。モーツァルトベスト10の次は、ベスト10推薦盤です。

朝吹 ベスト10の推薦盤を出してもらうのは、おもしろいアイデアですね。そういうのが好きな会員がたくさんいますから。アンケートの結果をホームページに載せて広報に使うとか、音楽雑誌に載せてもらうとか、今回の結果は今後の例会の出し物を考える上でも、参考になると思いますよ。

——私は、愛好会が選ぶベスト10のCDやDVDが作れないかなと思っています。新入会員にプレゼントしてもいいし。

みなさま、貴重なご意見、ありがとうございます

私の好きなモーツァルト・ベスト10 (11～30位の曲)

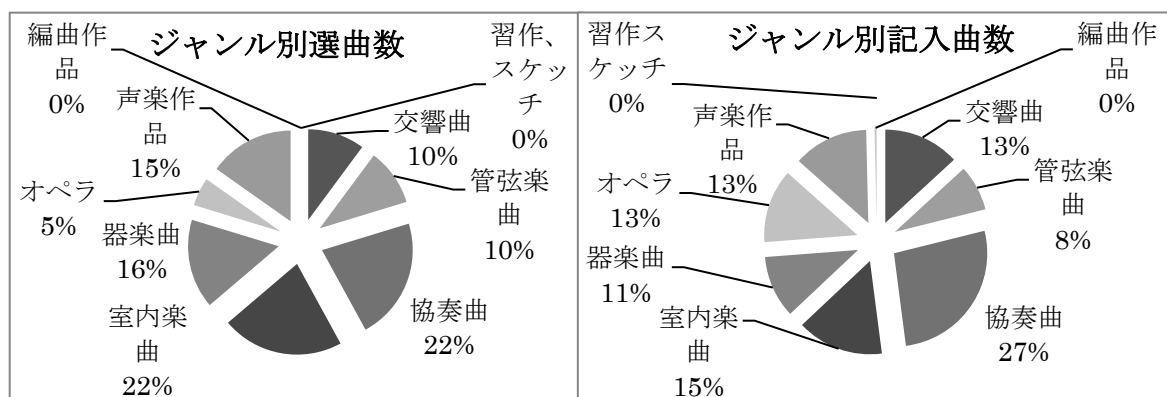
順位	K 番号	得点	曲 名
11	467	122	ピアノ協奏曲第21番 ハ長調
12	626	104	レクイエム ニ短調
13	543	102	交響曲第39番 変ホ長調
14	525	97	セレナード ト長調 《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》
15	595	95	ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調
16	299	87	フルートとハープのための協奏曲 ハ長調
17	488	78	ピアノ協奏曲第23番 イ長調
18	588	75	オペラ 《コシ・ファン・トッテ》
19	364	70	ヴァイオリンとヴィオラと管弦楽のための協奏交響曲 変ホ長調
20	427	67	ミサ曲 ハ短調
21	183	61	交響曲第25番 ト短調
22	136	58	ディヴェルティメント ニ長調
23	334	56	ディヴェルティメント ニ長調
24	516	55	弦楽五重奏曲第4番 ト短調
25	285	49	フルート四重奏曲第1番 ニ長調
26	504	42	交響曲第38番ニ長調 《プラハ》
27	563	40	弦楽三重奏のためのディヴェルティメント 変ホ長調
28	412	39	ホルン協奏曲第1番 ニ長調
29	491	39	ピアノ協奏曲第24番 ハ短調
30	271	38	ピアノ協奏曲第9番変ホ長調 《ジュノム》



座談会出席者

左から高橋、宮田、吉田、朝吹、紺野のみなさん

ジャンル別選曲数、曲の記入数 (Wikipedia による分類)



ジャンル別順位

ジャンル	順位	K 番号	選曲数	曲 名
交響曲	1	550	28	交響曲第40番ト短調
	2	551	23	交響曲第41番ハ長調 《ジュピター》
	3	543	16	交響曲第39番変ホ長調
	4	183	11	交響曲第25番ト短調
	5	504	8	交響曲第38番ニ長調 《ブラハ》
	6	385	6	交響曲第35番 ニ長調 《ハフナー》
	7	201	3	交響曲第29番イ長調
	8	425	3	交響曲第36番ハ長調 《リンツ》

管弦楽曲	1	525	18	セレナード ト長調 《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》
	2	136	14	ディヴェルティメント ニ長調
	3	334	11	ディヴェルティメント ニ長調
	4	361	5	セレナード変ロ長調 《グランパルティータ》
	5	320	4	セレナード ニ長調《ポストホルン》
	6	250	2	セレナード ニ長調 《ハフナー》
	7	287	2	ディヴェルティメント 変ロ長調 《第2ロードゥローン》
	8	546	2	弦楽のためのアダージョとフーガ ハ短調
協奏曲	1	466	35	ピアノ協奏曲第20番ニ短調
	2	622	33	クラリネット協奏曲イ長調
	3	467	18	ピアノ協奏曲第21番ハ長調
	4	595	15	ピアノ協奏曲第27番変ロ長調
	5	299	14	フルートとハープのための協奏曲ハ長調
	6	364	14	ヴァイオリンとヴィオラと管弦楽のための協奏交響曲変ホ長調
	7	488	14	ピアノ協奏曲第23番イ長調
	8	219	8	ヴァイオリン協奏曲第5番イ長調 《トルコ風》
	9	412	8	ホルン協奏曲第1番第1楽章ニ長調
	10	491	8	ピアノ協奏曲第24番ハ短調
	11	537	7	ピアノ協奏曲第26番ニ長調 《戴冠式》
	12	216	5	ヴァイオリン協奏曲第3番ト長調
	13	271	5	ピアノ協奏曲第9番変ホ長調 《ジュノム》
	14	450	4	ピアノ協奏曲第15番変ロ長調
	15	503	4	ピアノ協奏曲第25番ハ長調
	16	417	3	ホルン協奏曲第2番変ホ長調
	17	447	3	ホルン協奏曲第3番変ホ長調
室内楽曲	1	581	24	クラリネット五重奏曲イ長調
	2	285	10	フルート四重奏曲第1番ニ長調 第2番ト長調 第3番ハ長調
	3	516	10	弦楽五重奏曲第4番短調
	4	563	7	弦楽三重奏のためのディヴェルティメント変ホ長調
	5	452	6	ピアノと管楽器のための五重奏曲変ホ長調
	6	465	6	弦楽四重奏曲第19番ハ長調 《不協和音》（ハイドン・セット第6番）
	7	423	5	ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲第1番ト長調
	8	370	4	オーボエ四重奏曲ハ長調
	9	515	4	弦楽五重奏曲第3番ハ長調
器楽曲	1	331	25	ピアノ・ソナタ第11番イ長調 《トルコ行進曲付》
	2	545	7	ピアノ・ソナタ第15番ハ長調
	3	310	6	ピアノ・ソナタ第8番イ短調
	4	265	5	《ああ、ママは云うわ》による12の変奏曲(キラキラ星変奏曲)ハ長調

	5	330	5	ピアノ・ソナタ第10番ハ長調
	6	475	5	幻想曲ハ短調 (ピアノ)
	7	332	4	ピアノ・ソナタ第12番ヘ長調
	8	397	4	幻想曲ニ短調
	9	448	4	2台のピアノのためのソナタ ニ長調
	10	457	4	ピアノ・ソナタ第14番ハ短調
	11	576	4	ピアノ・ソナタ第17番ニ長調
オペラ	1	492	38	オペラ 《フィガロの結婚》
	2	620	32	オペラ 《魔笛》
	3	527	20	オペラ 《ドン・ジョヴァンニ》
	4	588	10	オペラ 《コシ・ファン・トッテ》
	5	344	1	オペラ《ツァーデ(後宮)》
	6	366	1	音楽劇 《クレタの王イドメネオ》
	7	384	1	オペラ 《後宮よりの逃走》
声楽作品	1	618	26	モテット《アヴェ・ヴェルム・コルプス》 ニ長調
	2	626	23	レクイエム ニ短調
	3	427	12	ミサ曲 ハ短調
	4	317	6	ミサ曲ハ長調 《戴冠式ミサ》
	5	339	5	証聖者のためのヴェスペレ(晩課)ハ長調
	6	476	4	リート《すみれ》ト長調
	7	523	4	リート《タベの想い》 ヘ長調
	8	524	4	リート《クローエに》 変ホ長調
	9	596	4	リート《春への憧れ》 ヘ長調
	10	165	3	モテット《エクスルターテ・ユピラーテ》 ヘ長調
	11	321	2	主日のためのヴェスペレ(晩課)ハ長調
	12	337	2	ミサ・ソレムニス ハ長調
	13	505	2	レチタティーヴォとアリア《どうしてあなたが忘れられるだろうか》

♪ プロジェクトメンバーの「ひとこと」 ♪

<私のひとこと>

K.183 左近允 輝一

会報50号記念として、素晴らしい企画が実現し、とても喜んでます。メンバーそれぞれの持ち味、個性がうまくマッチし、過去にないと思われる大アンケートになり

ました。随分いろいろと調べましたが、NHKも音楽の友などの雑誌も、モーツァルト協会もこれほど本格的な調査は行っておらず、データとしても価値があるのではないかと考えています。

このアンケート方式は、文藝春秋社の「東西ミステリーベスト100」という本を読

んでいて、ひらめきました。国内、海外の膨大なミステリー作品の中から約400人のミステリー関係者が「ベスト10」を選び、ランク化したのです。

この方式を活用してよかったものかどうか。ミステリーとモーツァルトは違ったかなという思いもあります。しかし、座談会で宮田さんが「こういうお遊びはモーツァルトも喜んでくれる」といつてくれたのが、うれしかったです。

いろいろとお叱りもうけましたが、モーツァルトベスト10などという試みを、個人ではなく、組織でやるとして、ある程度普遍性のある結果を期待するのだとしたら、モーツァルト大好き人間の集まりである、愛好会しかないだろうと、いまでも思っています。

<メンバーとしてひとこと>

K.505 神谷 昌孝

今回、皆さまには愛するモーツァルトの曲から10曲のみ選び、かつ順位付けをするという無理難題にご協力いただき感謝申し上げます。

集計結果はある程度予想通りかもしれませんが、個々の回答を拝見すると思わぬ曲が1位に選ばれていたりして大変興味深かったです。今回紙面の都合で紹介できませんでしたが、曲への思いの強さを平均点（得点／人）でみるとオペラでは「コジ」が一位だったり、ピアノ協奏曲では25番、ジュノムが上位に来ていて、ここらあたりに愛好会ならではのこだわりが見られるのではと思っています。

ご要望があればデータのご紹介もできると思います。

次回の実施は10年後でしょうか？！

<ひとこと>

K.134 桐生 雅明

高い回収率を実現し、多くのデータ集約をしていただいた皆様にお礼を申し上げます。高順位の曲は「いかにも」という感じですが、知りたいのは、それらの「どこが、どうよいか」です。今後掲載予定の「ひとこと」がとても楽しみです。

また、1人しか選ばなかったような曲にこそ、その人の個性が現れるので、これも楽しみです。

<一言と言われれば>

K.271 井戸 新子

男性メンバーの年齢とも思わない事務処理能力、企画力にただただ敬服いたしました。

<アンケート集計の感想>

K.488 泉茂 行

・皆さんがモーツァルトの曲に詳しいことがよくわかった。新しい会員の皆さんも異口同音に「初心者なのでこれから勉強していきます」と言われるが、初心者コースを卒業、ゆとりを持って入会され、ツウの入口に立っておられるとお見受けした。

・その表れとも思えるが、プロジェクトの準備会では10曲連記してもらうのは難しいのではないかと心配したが、5曲連記の方が2名あったほかは全員10曲書かれていた。また、ケッヘル番号と曲名の不一致や、ケッヘル番号の版数による表記の混乱を心配したが、不一致は2曲のみ、偽作の疑いがあってもあえてケッヘル番号の6版

で指定されたのが 2 曲で、他は全て第 1 版の番号がきちんと記入されていた。

・集計はエクセルという表計算ソフトで行った。ソフトに習熟したメンバーがおらず、足し算を力仕事でやることにしていたが、私は気に入らなかったのも、エクセルに内蔵されている統計の各種計算式の使い方を勉強して、7 種の統計データを算出した。ベスト 10 の曲に一致した各人の選曲数といったデータも出ている。コンピュータは 1 曲もたがえず一網打尽に処理してくれ、当然のこととはいえ一種の感動を覚える。しかし、一方で不気味にも思う。皆さんの曲に関するアナログの感性情報は、そのデジタル処理の網の目からはかなり漏れているだろうと。

・それを補うのが、アンケートに選曲とともに書いて頂いた「私のひとこと」である。曲に関連した思いが記されており、実に 59 人の方が記入されていて、思い入れの強さをうかがうことができる。プロジェクト会議では、これを活かさない手はない、「アマデウス通信」や予定されている「創立 40 周年記念誌」に載せようという議論をしている。公開を前提にした依頼はしなかったもので、ご本人の了解をとり、曲名リストと一体で掲載しないと意味がないので、実行には困難が予想される。今後とも全会員の協力とご支援をお願いしたい。



「私の好きなモーツァルト・ベスト10」 に寄せて

K.425 朝吹 英和

オペラや管弦楽曲、室内楽曲から器楽曲、ミサ曲、協奏曲など様々なジャンルで珠玉

の名品の数々を作曲したモーツァルトの作品の中から 10 曲を選び順番を付けるというアンケートの結果が楽しみである。

予めプログラムが提示されているコンサートは別にして、普段「今日はモーツァルトの何を聴こうか」と思い CD ラックを眺めていて「その日その時の気分によって聴きたい曲が異なるのがモーツァルトの特徴ではないか」という思いに至った。勿論、今晚出掛けるコンサートで演奏される曲目を予習する積りで聴く場合もあるが、お気に入りの愛聴盤に手が伸びたり、同曲異演の聴き比べを思い付いてチョイスする場合もありその動機も様々である。

アンケートは 5 月 28 日に記入したので、「私の好きなモーツァルト・ベスト 10」はその時点でのランキングである。

私のベスト 10 の結果をジャンル別に見ると、オペラが 4 曲、協奏曲が 3 曲、交響曲が 2 曲、そして管弦楽曲が 1 曲であり、図らずも全てが管弦楽を伴う作品であった。

モーツァルトの作品の特徴である色調や音調の多彩な変化に富む作品としては声楽を含めて楽器編成のバリエーションによって創造された音楽に私が最も惹かれている結果であろう。

なお、ベスト 20 まで許されるのであれば、「後宮からの誘拐」、「交響曲第 39 番」、「ポストホルンセレナード」、「ピアノ協奏曲第 22 番」、「ピアノ協奏曲第 24 番」、「ピアノ協奏曲第 27 番」、「フルート協奏曲第 1 番」、「弦楽五重奏曲ハ長調」、「ディヴェルティメント変ホ長調」、

「ピアノのための作品」等がランクインする筈である。

「アマデウス通信」に期待する

K.425 朝吹 英和

【私の好きなモーツァルト・ベスト10】

(2018.5.28)

順	K 番	曲 名	私の推薦盤
1	527	ドン・ジョヴァンニ	クレンペラー、クルレンツィス
2	492	フィガロの結婚	ベーム、ジュリーニ、クルレンツィス
3	588	コジ・ファン・トゥッテ	ベーム、クルレンツィス
4	504	交響曲第38番	マルケヴィッチ、ガーディナー、ヤーコプス
5	622	クラリネット協奏曲	キング (CL)、テイト&イギリス室内管
6	488	ピアノ協奏曲第23番	ハスキル、ラローチャ
7	620	魔笛	クレンペラー、スウィートナー
8	466	ピアノ協奏曲第20番	ハスキル (P)、マルケヴィッチ&ラムルー管
9	551	交響曲第41番	ガーディナー
10	250	ハフナーセレナード	ヴェーグ&ザルツブルグ・カメラータ・アカデミカ

古池や蛙飛びこむ水の音

有名な芭蕉の俳句を読んで皆様はどのような光景を思い浮かべましたでしょうか。俳句は読み手の想像力とも相俟ってその世界が広がる文芸ですので正解はありませんが、古池からの連想で静かな情景の中で蛙が池に飛び込んだ水音が聞え、やがてまた元の静寂に戻ったという情景が先ずは浮かぶのではないのでしょうか。一方で蛙は繁殖期を迎える春の季語ゆえに、掲句は古池に方々から数多くの蛙が次々に飛び込んで活況を呈している様を詠んでいるとの解釈も成り立ちます。俳句は僅か十七音の短詩ですので、読み手の想像力によってその世界が広がります。

閑話休題。モーツァルトの音楽を聴くだけであれば、一人で出来る訳ですが、同好の士が集まっている「日本モーツァルト愛好会」の魅力は、ご紹介した「俳句の読み」に通じるものがあると思います。今聴いたばかりのモーツァルトの作品について会員や出演者と語り合い、意見交換する事の楽しさは格別なものがあると思います。

例会や音盤で同じ演奏を聴いても受け取り方は各人各様ですし、それぞれのモーツァルト体験に基づくお話を聴く事によって啓発されたり、何か気付いたりする事も多いと実感しています。更に話題はモーツァルトに限らずお互いの趣味の話や芸術全般に及んだりして際限がありません。

その意味で、私は愛好会の魅力の3本柱として「例会」・「懇親会」・「アマデウス通信」があり、いずれにも共通するコン



「アマデウス通信」50号を迎えて

セプトとして「愛好会ならではの」を挙げたいと思います。

モーツァルトの作品を聴くためのコンサートは数多く開催されていますので、例会のプログラムや出演者については、「愛好会ならではの」の企画を实践したいと考えています。最近の例では、フォルテピアノとピアノの聴き比べ（小倉貴久子さん）、4人で奏でる交響曲（宮村和宏さん達）、オーボエ四重奏曲のピッコロ版（梶川真歩さん）、弦楽四重奏版によるピアノ協奏曲（坪田昭三さん）や演奏機会の稀な作品も取り上げて参りました。

更に「若手演奏家シリーズ」では伸びしろ十分の新進気鋭の演奏家に登場して頂いておりますが、大江 馨さんや小堀勇介さんのようにその後大ブレイクされてご活躍中の方も大勢おられます。そして出演者と会員の交流が図られる「懇親会」の素晴らしさは正に「愛好会ならではの」の醍醐味ではないでしょうか。音楽が好きな友人に話をするとても羨ましがられます。

最後になりましたが、「アマデウス通信」は活字媒体ですので「例会」や「懇親会」とは違ったステージでの味わいや、記録として残るメリットがあると思います。折に触れてバックナンバーを紐解く事も楽しみのひとつです。

泉編集長はじめ皆様による「例会だより」によって例会の様子を追体験したり、欠席した場合でも出席出来たような気分になれます。

会員の皆様の様々な視点やそれぞれのモーツァルト観に基づく投稿に共鳴したり、自分とは違った解釈や意見に教えられたり、刺激を受けたり、また新しい情報を得る事も「アマデウス通信」の魅力だと思います。

その意味において、第50号を契機として皆様のモーツァルトに対する思いやオマージュ、推薦音盤・演奏家・書籍等の紹介、コンサートレビュー、私のケッヘル番号紹介、海外ツアー体験記などの投稿によって誌面の一層の充実が図られ、会員交流の場として益々発展する事を切望すると共に、大いに期待しております。

文字数は問いませんので、何か思い付いた事柄についてお気軽にツイート感覚で投稿して頂ければ幸いです。皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。



「アマデウス通信」No.50 記念号発刊を祝して

K.543 高橋 勇

「アマデウス通信」（以後アマ通）もここにNo.50号となりますが、その間No.1創刊号からすべて一人で編集を続けてきたガーディナー・イズミこと、泉茂行編集長に先ず謝意と祝意を申し上げます。

アマ通No.50記念号になにか書くにあたって、最初のデモ版「会員通信」

（2000/09/15）とアマ通No.1（2000/12/09）を引っ張り出して見てみました。創刊からすでに18年、本当に長きにわたって継続していることに感無量です。

デモ版「会員通信」には泉さんが発行主旨、編集方針等を提案されていて、すでに今に至る方向感が定まっていることに気付きます。

ただ当初提案されていた泉さん以外の編集委員がいなかったり途切れたりして、すべての負担が泉編集長の双肩にかかっていることにご苦労されたことと思います。

アマ通 No.1 では福田邦夫元代表「千年紀と世紀末—そして新世紀に向かって」から始まり、次期代表となる播磨克彦元代表「創刊に寄せて」他 16 名の方々の投稿文を懐かしく読みかえました。しかしそれらの投稿者の多くの方がすでに愛好会を去っており、今も現役で愛好会を楽しんでおられる方は数少なくなりました。時代の流れとは言え淋しさ感はまぬがれません。

(No.1 投稿者 16 名中、現会員は紺野氏泉氏 2 名のみ)

さて、毎回アマ通ではモーツァルトを語り健筆をふるう方々の文章に興味深く読んでいますが、いくつかアマ通の今後について思うことを記してみたいと思います。

1、ひとつは愛好会有識者によりコンセプトの再確認をしていただけたらいかがでしょうか。一度踏みとどまり摺り合わせることは大切なことだと思います。さらに当初提案されていたように編集協力者が得られれば大いに今後の手助けとなると思います。

2、新聞雑誌にしろ同人誌にしろ、いずれも書く人と読む人がいます。どちらに軸足を置くか、当然双方を前提に編集していることでしょう。しかしわたくしは読む人（音楽では聞く人）の立場でいることが多く、読者として参加しています。

投稿者の知識や趣味を知って刺激される、また、なるほど・・・！があったり、いいですね。書くことが不得手の方もいますし、一方書ける人は書き、掲載される、それは長続きの秘訣ですし、とても自由で良い環境だと思っています。

3、記念号や特集号で会員全員に投稿を呼び掛けることもいいですね。テーマがあ

れば誰もが書きやすくなるし投稿意欲もわいてきます。

先月案内のあった「モーツァルト・ベスト 10」アンケートは全員参加型の企画でいいですね。愛好会としての傾向を知るだけでなく対外的にも発信できますし、また愛好会のアイデンティティであるかもしれません。

4、例会臨時参加者の感想・批評等のエッセンスを紹介するのも良いのではないのでしょうか。愛好会員の投稿だけでなく第三者の意見や感想は興味あるところです。

5、最近アマ通では愛好会の企画紹介、新入会員紹介が掲載されていますが愛好会の動向を知るうえで大切です。これは以前から希望していたことでもありました。

以上、すでに実施・検討されていることもあるでしょうが、幸い朝吹代表のアマ通への思いは強く、新しい息吹も加味されているように感じます。

歴史のある「アマデウス通信」です。創刊当時の主旨を再確認し、新たなコンセプトでさらに会員の皆さんに喜ばれるよう、また会員相互の良好な関係を育む媒体であってほしいと願っています。



アマデウス通信 50 号発刊に寄せて

K.450 宮田 宗雄

アマデウス通信の創刊号 (No.1) が福田代表時代の 2000 年 12 月 9 日に発刊され、それから約 17 年半、今ここに 50 号を発刊するに至りました。

アマデウス通信を発行するに当たっては、継続するのが難しいと消極的な意見もありましたが、泉編集長の強い熱意によって発行することになりました。愛好会の会員だった故横溝氏曰く、「この種の会報誌は3号ぐらいの刊行で自然消滅することが多く、『3号誌』と揶揄されている」そうです。事実、我が日本モーツァルト愛好会でも1987～88年に「WAM通信」という会報が刊行されていましたが、3号誌だったようです。

このアマデウス通信は、福田さんから始まって現在の朝吹さんまで実に代表は5人を数えますが、この間、編集・発行を泉さんお一人で継続してきたわけであり、このご努力は並大抵のことではありません。「言うは易し、行ふは難し」よくぞここまで継続できたものだと、ただただ敬服するのみです。

ここに50号発刊を心より祝福するとともに、泉さんの多大なるご尽力に感謝の意を表したいと思います。

「会員の広い交流の場の提供、会員の世界が広がるようにをモットーとし、敷居の高さをゼロ、バリアフリーでオープンにやっていきたい。例会の演奏を聴いて楽しみ、更に会員通信で二倍三倍に楽しめればと思っている」と泉編集長は創刊号の編集後記に述べていますが、まさに初心が貫かれているという思いがします。

今までのアマデウス通信を読み返してみると、その時々の方員の皆さんの考え方や思いが詰まっていて、例会の感動やその場の状況が鮮明に伝わってきます。例会と共に

にアマデウス通信の一つひとつの積み重ねが愛好会の財産だと思いました。

書くのが苦手、上手く書けないという意識は捨て、自由帳のようにもっといろいろな人が、気軽に自由に投稿してもらうようになれば良いと思います。

今後とも、愛好会のあゆみと共に、アマデウス通信がこの先ずっと継続・発展していくことを切に願っています。



「アマデウス通信」に寄せて

K.466 中條 熙子

「アマデウス通信」50号発行おめでとうございます。いつもご尽力下さってます泉編集長に心から敬意を表します。

7月の例会の折り泉編集長から「アマデウス通信」に関する感想を・・・との依頼を受けました。わたし如き者がなぜ？と思いましたが、心赴くままに筆を走らせました。

会員の皆様が投稿された「アマデウス通信」をいつも心行くまで拝読いたしております。

朝吹代表の「神ってるモーツァルト」、毎回興味深く読ませて頂いております。

「神ってるモーツァルト」、朝吹代表ならではの感性豊かな表現ですね。独自の切り口の機知に富んだ文章で、モーツァルト作品がいかにか深層性を帯びているかよく解ります。華麗なる一族の朝吹代表、流石に名文です。毎回心惹かれます。また、俳人と

してもご活躍の朝吹代表、文章には心地よいリズムが感じられ、これからも拝読するのが楽しみです。

泉編集長の毎回のご投稿、音楽学者のようなきめ細かで学術的な内容、敬服いたしております。時には私の頭脳では着いて行く事が出来ず何度も何度も読み返します。そしてやっと理解出来るようになり私の知識が又一つ増えてゆくのです。大学で講義を受けていた頃の昔の感覚が甦ってきます。これからも泉さんの博識に触れさせて戴くことを期待しております。

乗松さんが投稿される文章も印象的です。簡潔でそこには無駄なことはありません。決して難しい語彙は使われていないのですが、奥の深さを感じます。

以前、乗松さんが出版された著書『モーツァルトへのオマージュ』について、「この本からは音楽が流れてくる」と礒山先生が書評されておりますが、乗松さんの文章はいつもリズムをなしております。私はこのような文体が好きです。次はどのような内容のお話でしょうか？ 楽しみです。

白石さんの「楽屋口から」、毎回尊敬の念を持って拝読いたしております。ファゴット奏者でもいらっしゃいます白石さん、音楽に関するいろいろな事が理論的かつ専門的に書き記されております。ユーモアも交えながら丁寧に解説されておりますので、時間はかかりますが私でも解るようになります。次のシリーズが待たれます。

藤田さんのシリーズ「私のお気に入りのモーツァルト」、いつも楽しく読ませて頂いております。「お気に入りのモーツァルト」、人それぞれ感じ方も違うかもしれませんが、毎回の藤田さんの「お気に入りのモーツァ

ルト」を改めて聴いてみたくなるのは私だけでしょうか。

他にも毎回沢山の方々が投稿され、私は楽しく拝読しております。皆様本当に素晴らしい内容でいつも感銘を受けております。中にはあまりにも高度な内容で理解するのに随分時間を要する時もあります。一方では投稿された方の文章にその方のお人柄を感じて心温かくなる瞬間があります。とても幸せな気分になります。

これからもいろいろな方々が投稿されて充実した「アマデウス通信」になることをお祈り申し上げます。

2018年7月



50号を振り返って

K.488 ガーディナー・イズミ

創刊号は 2000.12.9 という日付になっている。当時愛好会は沈滞気味で、第 250 回例会（同年 8 月）では会の活性化策、会員減対策についてのフリートーキングが行われた。その場で私は会誌の発行を提案し、了承された。それが発端である。早速会誌の題名を決めるため、会員からの提案を求めてアンケートを行った。その結果、『アマデウス通信』に決まった。次点が『アマデウス広場』だった。私は、会員の交流、親睦を深める憩いの広場が期待されているのだと感じ、草花が咲き誇り、樹木が茂った広場にしたい、そしてその広場の庭師として世話をすると宣言した。そうしたら、吉田智子さんが「ガーディナー・泉」と呼んでくれたので、以来初心を保つべく、それ

をペンネームとしている。オペラ《偽りの女庭師》にひっかけるつもりもあった。この曲は18歳時の作品で、話の筋は、美女が恋の恨みを晴らすため庭師に身をやつして、復讐の機会を窺うという他愛ないものだが、音楽は《イドメネオ》や《フィガロの結婚》作曲の下地になったように感じられる秀作である。序曲でもいいから、聴かれることをお勧めする。庭師を語り出すと深入りして、横道にそれてしまう。18世紀啓蒙主義の時代、自然へ目を向けたルソーの影響もあって、自然の造形美を活かすイギリス庭園が普及していった。ウィーンでも貴族が造園に励み、ヨーゼフ二世が宮廷の狩猟場であったアウガルテンとプラターを公園に整備して市民に開放し、ウィーンの森への散策を奨励した。《フィガロ》では庭師が登場するし、夜の密会の場合は伯爵家の庭園である。庭師は屋外にいながら家の内情をよく観察しており、隅に置けない存在であった。《アイネ・クライネ》の作曲事情は不明とされるが、モーツァルトが家族ぐるみで付き合ったウィーン大学植物学教授ニコラウス・フォン・ジャカンの聖名祝日のため1787年8月10日に作曲し、翌日ジャカン邸の祝宴で一家とともに庭園で演奏したという説が有力になっている。そこはベルヴェデーレ宮殿に隣接し、現在ウィーン大学植物園になっている。ジークリート・ラウベの『庭師の娘』という短編小説がある。医師メスメル博士の邸園を管理する庭師の娘が父親の反対を押し切って庭師になる物語である。病の床についた父親に代わって庭園の世話を任せられ、彼女流の花壇を造る。《バスティアンとバスティエンヌ》の初演で訪れたモーツァルトが、花壇に興味をもち音符を描き込む。作り話ではあるが、私が追い求める花壇がそこにあった。この花壇に言及しておきたかった。

創刊号には今は亡き横溝正信さんが、辛

口の激励を寄せられた。＜「3号誌」という軽蔑的な言葉があります。会報の刊行は『会』が、その相互理解（情報交換の場として）と親睦を深める目的・手段を主旨とするようですが、半年も1年も経たないうちに3号ぐらいの刊行で自然消滅してしまう運命を揶揄しているものと思います。私たちの日本モーツァルト愛好会でも、1987～88に『WAM通信』という会報が刊行されました。残念ながら「3号誌」でした。

（中略）「創刊に寄せて」というテーマをいただいたからには、今後の発展・充実した紙面を期待してのエールを送るべきと心得ているつもりですが、敢えて冒頭からの辛口の言葉を並べ立てましたのは、2度と同じ運命の「愛好会誌」を作りたくない思いがあるからです。ご理解下さい。これは、この「愛好会誌」が継続・発展するのも、消滅してしまうのも、ただただ会員一人ひとりの理解と積極的な支持（原稿依頼があったら快く応ずる等々）に懸かっていると信じている私からのメッセージです。＞

横溝さんの心配にもかかわらず、私は継続することに楽観的だった。横溝時代に比べ、ワープロが使える、インターネットで原稿が集められると考えたからである。当時インターネットを使いこなせる人は半数ぐらいだったが、時とともに増え全体に及ぶと考えた。現状は会員の新陳代謝があるとはいえ、そのまま高齢化した面もあって、今でも結構手書き原稿を受け取って、文字入力している。

私は長らく現役生活を続けていたので、編集に時間をかけられなかった。それと、なけなしの時間を割くなら、社会活動に貢献すべきだと考えていた。それを、趣味の活動に費やすのは、時間の無駄遣いではないかという葛藤がつきまとっていた。それは今も変わらない。趣味だって人生に潤いを与えてくれる。乗りかかった舟は途中で

投げ出す訳に行かない。そんな意地が働いている訳でもない。色々な葛藤が均衡した状態で、惰性、慣性力、そして、歴代の代表が何の注文もつけず、好き勝手にやらせてもらえたこと、また多くのミスや批判も気にしない鈍感力が継続の力になっているのだろうと思う。

発行した後、毎度数名の方からお褒めの言葉と激励を頂くが、多くの方は無反応に見える。その方々は特に言うことはないのだろう、あるいは誌面の内容について肯定と批判が相半ばして、何とも言えないのだろうと私は受け止めている。

クラシック音楽は、魅力を味わえるようになるまでに、受け手側にも一定の知識や経験を求められることから、取っつきにくいと一般には思われている。音楽が複雑になるほど、知的理解が求められ、音楽学者や評論家が活躍する。知性が優位になる背景であり、本誌にもそれが反映しているのだろう。重かったり、理屈っぽくなる傾向である。私は当初から、それを避けようとしてきた。春になると道端の雑草でも可憐な花をつけ、いじらしくもあり、自然の奥行きを感じる。雑草のような原稿でも輝けると、投稿を呼びかけたが、反応ははかばかしくない。近年は路傍の花など見向きもされず、園芸種の草花にかなわない。野草よりバラの花、そして大木が、見た目がよく注目を集める。路傍の花のような原稿など、投稿したくないと思うのも人情だろう。あるいは、普段着のまま舞台に上がるわけにはいかないのだろう。

アマデウス通信について主婦の会員に聞いたことがある。男性会員は、自分の働きがあるから音楽に好きなだけつぎ込めるし、知識も豊富になり、人前で披露できる。主婦は生活に追われて、そんな余裕はなかった。原稿を書ける持ち合わせがない、と悔しさの滲んだ発言をされた。私はそのよ

うな方の存在を心に刻んでいる。それでもなお、何かの心情を吐露してもらえないかと、未練がましく思案するのである。

例会後の懇親会で、演奏の感想や日頃の音楽体験について、素晴らしい話を聞かせてもらうことがある。私はすかさず、「飾らなくていいから、今しゃべったそのままを投稿してもらえませんか」とお願いするが、一向に実現しない。会話と文章は違うし、得手不得手もある。仕方のないことと思いつつ、ほとんど不可能と感じながら、私は「アマデウス広場の花壇」を夢想し、追い求めている。なぜだかわからない。何度か紹介したことがあるが、私はミーム説で自らを納得させている。進化生物学者リチャード・ドーキンスは著書『利己的な遺伝子』で、遺伝子は、盲目的な自然淘汰のはたらきによって、あたかも目的をもって行動する存在であるかのように仕立てられていることから、「利己的な遺伝子が生物個体を乗り物として操る」と、身体と遺伝子の立場を主客転倒して説明する。そして、「ミーム」（文化的遺伝子）を提唱した。ミームは文化的伝達の単位であり、遺伝子のように、自己複製を繰り返していく性質を持つ。これを遺伝子の比喻以上に実体があると考え、ミーム学として研究する学者もいる。ミームは心から心へと移り広がってゆく。もっとも多くの人に受け入れられることに成功したミームは、文化の形成発展に寄与する。モーツァルト・ミームもその成功例である。モーツァルト愛好会の発展もそのおかげを被っているのであろう。私のアマデウス通信への関わりも、内面に寄宿して心を操るモーツァルト・ミームのせいだ考えると一番辻褃が合う。しかし、ミームは利己的だから高齢化に向かう個体に早晚見切りを付けて、若い人に乗り移ってゆくだろう。私の予想では、順当に編集を受け継ぐ人が現れて継続するのではなく、一

旦途絶え、寂しくなったから復活しようという動きが出てくるような気がしている。アマデウス通信の継続も、モーツァルト・ミームの活力にかかっている。

My Favorite Mozart

私のお気に入りのモーツァルト

孤児院ミサ ハ短調 K.139

Agnus Dei

K.294 藤田 真人

Brilliant (輸入 CD) の "Masses" を購入し、「孤児院ミサ」(K.139) を聴きました。また、先日メル・ギブソン主演の映画「パッション」を見に行きました。

今までは、マタイによる福音書を読む程度の知識しかありませんでしたが、この映画を見て、この映画の内容についての論争はともかくとして、キリストが処刑されるシーンを映像で見たあとに、このようなミサ曲を聴くと、また感じるものが随分違うものだと思いました。

さっそく、アニュス・デイを聴いています。

(何回も繰り返し聴いています。もう 50 回くらい聴いたでしょうか?)

いやいや、これはすごい曲だと思いました。

最初のトロンボーン (でしょうか?) が恐ろしいくらいに美しいですね。(今まで聴いたことのないトロンボーンのような気がします)

そして、美しい男声独唱に引き継がれるのですが、この瞬間がまた、たまりません。

しばらくすると、男声の独唱からコーラスに移っていく部分がまた、美しいですね。

ワンパターンですが、この変わり目、引き継がれる部分がとても美しいのです。

しかし、このコーラスがほんとうにすごい! 言葉が見当たらないほどの天上的な美しさです。(ほんと、涙がでそう・・・)

また、コーラスのバックで奏でる弦が泣いているように聴こえ、心の琴線を揺さぶります。涙が出そうなところにもってきて、

最後は女声の独唱それに男声、女声と次々と重なっていくところが・・・

最初にこの曲を聴いたとき、レクイエムのラクリモーサが頭に浮かびました。

また、映画「アマデウス」のラストシーンがなぜか頭に浮かんできました。

いやいや、今回も、K.427 の Et incarnatus est といい、またまた、美しい曲に出会うことができました。

まだまだ、モーツァルトの曲の中には私の知らない美しい曲があるのかということを思いしらされました。

しばらくは、この「アニュス・デイ」にはまりそうです。ありがとうございました。

しかし、K139 ってモーツァルトがいくつで、この曲を書いたのでしょうか?

ホント モーツァルト恐るべし。



楽屋口から (6)

アマチュアとプロ

K.191 白石 孝

そりゃー音楽を生業にしているのがプロで
そうでないのがアマチュアだろー。

正しい。

じゃープロの奏でる音楽の方が感動が大きい
か？とは限らない。

ではオーケストラに於けるプロとアマチュ
アの違いはどんな所にあるのだろうか。
大雑把にまとめたものを次に示す。

	プロのオーケストラ	アマチュア・オーケストラ
楽団員構成	殆ど音大出身	アマチュアが殆どだが、音大出身者の多いオケもある。(注1)
1公演に対する練習 日数	平均2～3日 難曲では5～6日のこともある。	最低でも8日。 20日前後が一般的
主たる練習内容	楽器間の音量バランスや表情作りが中心	縦の線を揃える、音程を合わせ、 アーティキュレーションやボウイングの指導、これらが出来たら左記内容に進む
個人練習	難曲だと楽譜を借りて帰り練習することもあるが、普通は団のライブラリアンが管理していて奏者は楽器だけを持参して練習に臨む	コピー譜を持ち帰り(注2)練習するのが常。金管楽器などは住宅事情で音を出せなくても目で譜面を追うなど
練習会場	演奏会会場が使えるケースが多い。恵まれたオーケストラは自前の練習会場も	演奏会会場が使えるオーケストラはレアケース。公共施設の会議室や民間の幼稚園を使わせてもらうなど苦勞が多い

(注1) 地方では音大を出ても活躍の場が少なく、音楽に接していきたい人はアマオケにという事情がある。

(注2) 買ったレコードやCDを自分専用の携帯端末にコピーするのは合法であるのと同様、団で購入した譜面を、その団の団員が練習目的のためにコピーするのは違法ではない。

演奏者の技術レベルでみるとプロのオーケストラの場合は楽団間の差は無いと言ってよい。

（練習に費やした時間、指揮者との相性等の関係で仕上がる音楽の良し悪しは別であるが。）

しかしアマチュアの場合はその差が大きい。オーディションをやって篩を掛けているところもあれば定年退職後、楽器をやりたいからと言って音楽教室で1～2年学んだ人を受け入れているところもある。

筆者が那須地区に住んでいた時、ベートーヴェンの運命を一流と言われるプロオケと田舎のアマオケで聴く機会があった。プロの方は新日本フィルハーモニー交響楽団。

1994年6月、那須町文化センターでの公演。何かの助成がありS席、2,000円というのに釣られて聴きに行った。

那須町文化センターについて若干、説明しておく。有名な那須温泉からは20Kmほど離れていて東北本線・黒田原駅から徒歩20分くらいの所で施設ができた当初、周りは田んぼ以外何もないところだった。

余談になるが後年（横浜に戻ってから）、このステージで3回も演奏することになるとは夢にも思っていなかった。

1998年8月の集中豪雨災害で余笹川が氾濫した所のすぐ近くで、放牧されていた牛が濁流に流されて那珂川を100キロ近くブカブカ。水戸で救助され飼い主に返還されたというニュースをご記憶の方もあろう。

さてその新日フィルの公演だが、これほど失望した演奏会は他には無いというレベル

のものであった。

テンポには緩急無く、文字通りの安全運転といった味もそっけもない演奏だったからである。

一方アマチュアの方は石川フィルハーモニック。高校野球で「学法石川」という名前を聞かれた方もおいでだと思う。その福島県石川町に医師等のボランティア達が大学もない石川町に高校を出ても音楽を続けたい人たちのためにと設立されたオーケストラ。その演奏会に招待されたのは1995年6月。会場は石川町体育館。

ステージの足りない分はビールのケースを積み上げ、その上にベニヤ板を敷き詰めたもの。スタッフはボランティアたち。文字通りの手作り演奏会であった。

作り出された音はお世辞にも素晴らしいとは言えない。1楽章の有名なオーボエのソロも途中で息継ぎ「ン、そんなの有りか?」、奏者は中学生の女の子であった。

でも終わってみると清々しく美しい街で、みんなに愛され、必死に練習し、その成果を存分に発揮した石川フィルに感動した記憶は今なお鮮明に焼き付いている。

再び余談だが1996年11月と1998年11月にこのオーケストラにエキストラとして出演した。練習会場までは片道70キロ、しかも山道。

本番前の一か月は毎週水曜日、午後5時に帰宅し夕食をかけこみ7時の練習開始に間に合うようにと車を飛ばした。

若かったのと、ともかく応援したかったという気持ちがあったから出来たのだろう。

今回、言いたかったことはこんな事か。

期待値に対してそれを上回ると感動し、下

回るとがっかりする。

モーツァルトの話が無くして申し訳なかった。
(つづく)



私のケッヘル番号

ミサ曲 ハ長調 K.317《戴冠式ミサ》

K.317 本吉 英紀

モーツァルトは生涯にレクイエム ニ短調 K.626を含め、18曲のミサ曲を作曲した。このうち、ミサ曲 ハ短調 K.427《大ミサ曲》、レクイエムを除く16曲はザルツブルク時代に作曲された（ミサ・ブレヴィスト長調 K.49、ミサ・ソレムニス ハ短調 K.139《孤児院ミサ》は旅行でウィーン滞在時に作曲）。

一番初期の作品は上記のミサ・ブレヴィスト長調 K.49、モーツァルト12歳の作品。ザルツブルク時代最後の作品はミサ・ソレムニス ハ長調 K.337で24歳であった。

皇帝ヨーゼフ2世の政治改革を体現したコロレド大司教の着任（1772年4月）により、教会改革が実施された。それにより、ミサ典礼の短縮が求められ、大司教が司式する盛儀ミサも45分の時間的な制約を受けていた。このためか、モーツァルトのミサ曲は20分～25分程度のミサ・ブレヴィス（短いミサ）が多くなった。一番

短いミサ曲は、ミサ曲 ハ長調 K.220《雀のミサ》で、演奏時間は18分程である。

この間、モーツァルトのザルツブルク宮廷での地位は、

1769年11月14日宮廷楽団の無給の楽師長（コンサートマスター）（13歳）

1772年8月21日有給のコンサートマスターに昇格（16歳）

1779年1月25日宮廷オルガニストに任命（22歳）

このように順調に昇格している。

ミサ曲 ハ長調 K.317《戴冠式ミサ》は宮廷オルガニストに任命された直後の同年3月27日に完成されていることから、モーツァルトは任命された喜びと、今後の期待をこの曲に込めたものと思いたい。曲自体は豊かなオーケストラと美しい歌のパートがバランスを保っていて、彼の抱いていた協会音楽の理想の形が示されていると思う。特にクレドのエト・インカルナトゥス以降の音楽は素晴らしく、効果的な転調と、シンフォニックなオーケストラを伴っていて、その信仰告白は大変感動的である。また最後のアニュス・デイは《フィガロの結婚》第2幕冒頭の伯爵夫人のアリアに似通った旋律で歌われており、奥深い味わいがある。当時の教会でこのように美しいミサ曲を聴いた人々はどのように感じたのだろうか。教会には縁のない私ですが、この曲を聴くと心が落ち着き、元気をもらえる気がします。

この1枚：ステファン・クロウベリー指揮イギリス室内管弦楽団



「神ってるモーツァルト」Ⅳ

K.425 朝吹 英和

「私は月の前をおびた^{ことごと}しい雲が飛ぶのを見た。南から北へむかって、山々の向うから、次々と大軍団のように雲がせり出して来る。厚い雲がある。薄い雲がある。広大な雲がある。雲のいくつかの小さな断片がある。それらが^{おお} 悉く、南からあらわれて、月の前をよぎり、金閣の屋根を覆って、何か大事へいそぐように北へ^か駆け去ってゆくのである。私の頭上では金の^{ほうおう}鳳凰が叫ぶ声を聴くように思った」（三島由紀夫『金閣寺』第5章より）

モーツァルトのピアノ協奏曲第20番ニ短調 K. 466の冒頭を聴くと、台風の接近する中で金閣寺の宿直を申し出た溝口の心象を描写した三島由紀夫の文章が想起されます。

第1楽章は切迫したシンコペーションのリズムが暗く不安な情感を醸し出していますが、「魔笛」の夜の女王のアリア（第1幕4番）とも通底し、聴く者に何か異常な出来事の前兆のように響いて来ます。

モーツァルトはシンコペーションを効果的に使った作曲家として有名ですが、中でも強烈な印象を受けるのが交響曲第25番ト短調 K. 183の冒頭でしょうか。血塗れのサリエリが苦悶する背景に流れる強烈なアレグロ・コン・ブリオの音楽は映画「アマデウス」のドラマチックな幕開けに相応しい選曲だと思います。そして第4楽章でもこのシンコペーションが回帰して17歳の青年モーツァルトの心象を吹き抜けた嵐の激しさを強調しています。

また、モーツァルトの交響曲でのホルンは2本が通例でしたが、この作品では倍の4本が使用されているのも劇的な効果を上げています。（モーツァルトのホルン4本使用した交響曲は第18番へ長調 K. 130、第19番変ホ長調 K. 132、第32番ト長調 K. 318と合わせて4曲のみです）

更にモーツァルトのシンコペーションでは交響曲第38番ニ長調 K. 504の冒頭、「ドン・ジョヴァンニ」や「魔笛」等枚挙に暇がない程です。

バッハにもシンコペーションを多用した作品がありますが、ジャズでもシンコペーションが頻発すると聞きますが、古くはベニー・グッドマン（クラリネット）やキース・ジャレット、小曾根真等バッハやモー

ツァルトを演奏するジャズメンが多いのもシンコペーションがその鍵を握っているのだと思います。

そして、この度の「私のモーツァルト・ベスト10」で私が選んだ作品にも「ドン・ジョヴァンニ」や「交響曲第38番」そして「ピアノ協奏曲第20番」等が入っていますので、私は筋金入りの「シンコペーション・フェチ」なのかも知れません。

再び映画「アマデウス」に戻ります。雪の舞う中で酒を呷りながら一心に作曲するモーツァルト——そのバックにはピアノ協奏曲第20番のシンコペーションが流れて不穏な空気が漂います。ドアのノックに気付いてモーツァルトが扉を開けた瞬間に「ドン・ジョヴァンニ」の和音が豪然と鳴り響き、そこにはレクイエムの作曲を依頼しに来た使者の不気味な姿がありました。ニ短調からニ短調へ、シンコペーションからシンコペーションへの転換もまた心憎い演出ではないでしょうか。

第2楽章のロマンツェは穏やかな主題で抒情的な音楽が進行しますが、やがて木管が沈黙すると弱奏の弦楽器に乗って、モノローグめいたピアノが魅力的な夢見心地の旋律を歌います。しかし安らぎの時も束の間、聴く者は突如荒れ狂うト短調の中間部の嵐によって覚醒されます。ウィーンに定住して3年目を迎えたモーツァルトによる保守的な聴衆に対する挑戦のようにも思われ、ベートーヴェンがこの作品を特に愛した事にも得心が行きます。嵐の後にはまた平

穏な第1部が回帰してピアノシモで終息します。

第3楽章は力強い第1主題がピアノに登場し、目まぐるしく上行下行する音階と転調の中でピアノと木管楽器との応答が繰り返されます。そして短いカデンツァの後で突如ニ長調に転調するやバスーンとオーボエがコーダの口火を切り一気呵成に明るい雰囲気の中で終結に雪崩込みます。

「カデンツァのあとで彼は長調へ転ずる。それは魅惑的な愛らしさを持つコーダであり、感動的な雲間の陽光であり、同時にまた、おそらく社交的なものへのちょっとした帰還でもあろう——自分の客人たちに、親しみの印象を与えて立ち去らせようとする王者の騎士的な身振りである」（アインシュタイン『モーツァルト』より）

「一七八五年の頃から、モーツァルトの音楽はいちだんと深くなり、真摯かつ求道的傾向を見せるようになった。前年のハ短調ソナタ（K四五七）に続くハ短調のクラヴィーア幻想曲 K 四七五、ト短調のクラヴィーア四重奏曲 K 四七八、《フリーメイソンのための葬送音楽》K 四七七（四七九a）などに見られる内面的な音楽への志向は、八二年末から二年以上をかけて行われた六つの《ハイドン弦楽四重奏団》の辛苦にみちた彫琢——流麗な旋律に恵まれた作曲家の、求心的な構築様式の習得——を通じて、少しずつ準備されていたものである。また八四年一月におけるフリーメイソンへの入団も、モーツァルトの心境をとぎすまし深めるために、重要な役割を果たしたにち

がない」(礒山 雅『モーツァルトあるいは翼を得た時間』より)

「この曲ほど、不吉な嵐めいた重さと、それを弾ね返してゆく断固とした高貴さが劇的に対立する作品はないような気がする」
(辻 邦生)

正にピアノ協奏曲第20番は「神ってるモーツァルト」が随所に顔を出す傑作だと思います。(音盤推薦を加筆する)



より多くの臨時会員を求めて

K.581 広瀬 哲哉

我が日本モーツァルト愛好会も、あと1年少しで、創立40周年の例会を迎えます(2020年1月)。これまでの愛好会の長い歴史の中で、諸先輩が様々な局面で対処されて来たであろう、ご苦勞に思いを致し、愛好会の今後の存続・発展を考える時、運営委員の1人として、愛好会の会員数の維持・増加は、我々に課せられた大きな義務であると考えています。

とは言え、世界的にもクラシック音楽愛好家の数が減少し、また高齢化する中で、会員数の維持、ましてや、増加させることは、さほど簡単なことではありません。勿論、会員制なのだから、現行の会員だけがモー

ツァルトの音楽を楽しめばよいではないか、とのご意見もあるかと思いますが、何も手を打たないでいると、会員数が減るのは、目に見えているので、愛好会としては、会員数増加のための様々な試みを行っています。また、朝吹代表が機会あるごとに、皆さんにお願いしていますように、会員の皆さんからの新規会員のご紹介、(将来の会員につながり得る)臨時会員のご紹介は、その大変有効な手段だと考えていますので、引き続き、ご協力をお願いします。

期初に会計担当の本吉さんから報告がなされていますように、皆さんからいただく会費は、月に直すと2,000円、現在の会員数は110名強ですので、この掛け算で、220,000円が毎月の例会用原資となります。ここから、会場費・ピアノ代・調律代、チラシ印刷代、機関誌発行など諸経費を差し引いた残額が、出演者へのギャラに充てられるわけですが、皆さんに、新しい楽器の組み合わせを(フルートやオーボエと弦楽器など)、或いは、声楽であれば、複数の歌手の出演など、を楽しんでもらおうとすると、勢い、ギャラ総額の上昇につながるものの、この結果、会員の皆さんに喜んでいただけるのと同時に、新規会員や、(将来の会員につながり得る)臨時会員獲得にも絶好のPR材料になりますので、朝吹代表の下、「拡大均衡」の方針は今後も変わりません。「拡大均衡」の意味は、1人でも多くの会員・臨時会員を集めて、その会費収入を、より高い品質の公演の実現に回して行くことに他なりません。

愛好会としての、臨時会員獲得の試みですが、例えば、「ぶらあぼ」と言うコンサート情報誌に招待を、或いは、SNSの「みんなの公演」サイトにチケット半額優遇を提案する、月刊誌「音楽の友」に例会予定を掲載するなど、SNSを含めた外部の広告媒体を活用すると共に、出演者を中心としたブログやSNSに投稿する等を実施しています。ある程度の成果は出て来つつあります。

また、この8月例会向けについては、新しい試みでしたが、例会会場のある文京区にお住まいの会員・山崎幸子さんのお力添えを得て、文京区区報に情報を掲載したところ、5枚の申込がありました。

なお、会員の皆さんには、お友達を勧誘しやすいように、年間1枚の招待券を贈呈する制度を設けたこと（もしその方が会員になられたら、さらに1枚招待券贈呈）は、既にご連絡通りです。

会員の皆さんであれば、愛好会は、常日頃からモットーにしている「ツウでも、ツウでなくても楽しめる会」であることは、ご理解いただいていることと思いますが、外部の方々には、クラシック音楽のコンサートと言うとまだまだ敷居が高いのだと思います。でも、例会の開始前・休憩時間・終演後、さらには懇親会の席などで、これまで全く知らなかった人たちとの出会いの場や交流のチャンスがあり、そこにたまたま上質の音楽があるのだ、との逆転の発想で、職場や趣味のグループ、ご近所のお友達などをお気軽にお誘いくだされば、ありがたいです。

臨時会員申込は、チケット発券がなく、ただお名前を登録するだけで、当日の代金支払、もし、当日都合が悪くなったら、電話1本のご連絡をいただければ、それでおしまい、の便利な制度でもあります。

「この愛好会のアットホームな雰囲気のことを以前に知っていれば、もっと早く会員になったのに！」と言ってくくださる方を多く知っています。

会員の皆さんのお力添えを是非お願い申し上げます。

2018年7月30日



編集後記

▽本号のトップを飾っている「私の好きなモーツァルト・ベスト10」は2月の運営委員会で第50号記念号の企画として左近允さんが提案され、賛成を得て推進してきました。プロジェクトメンバーの熱意と尽力、会員の皆さんの協力で、期待通りの成果を得ることができました。さらに、左近允さんからは座談会の提案があり、初挑戦の難題をクリアしてまとめて頂きました。▽50号記念ということで、「アマデウス通信」への激励も寄せて頂きました。そして、通常原稿も加わり、3部構成になりました。お陰様で賑やかな紙面になりました。大いにお楽しみ下さい。

(ガーディナー・イズミ)